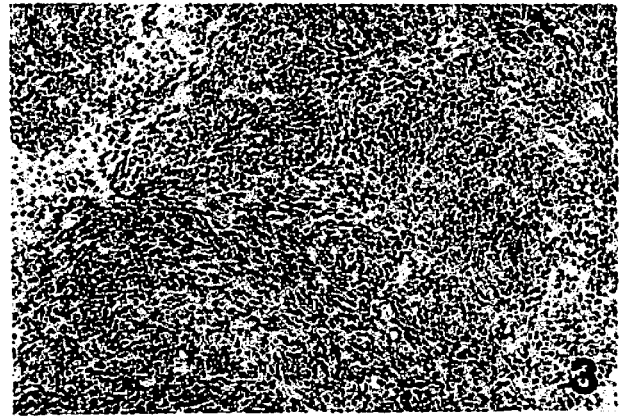
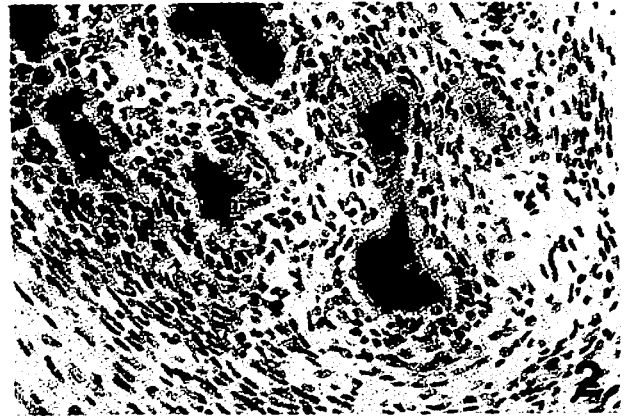
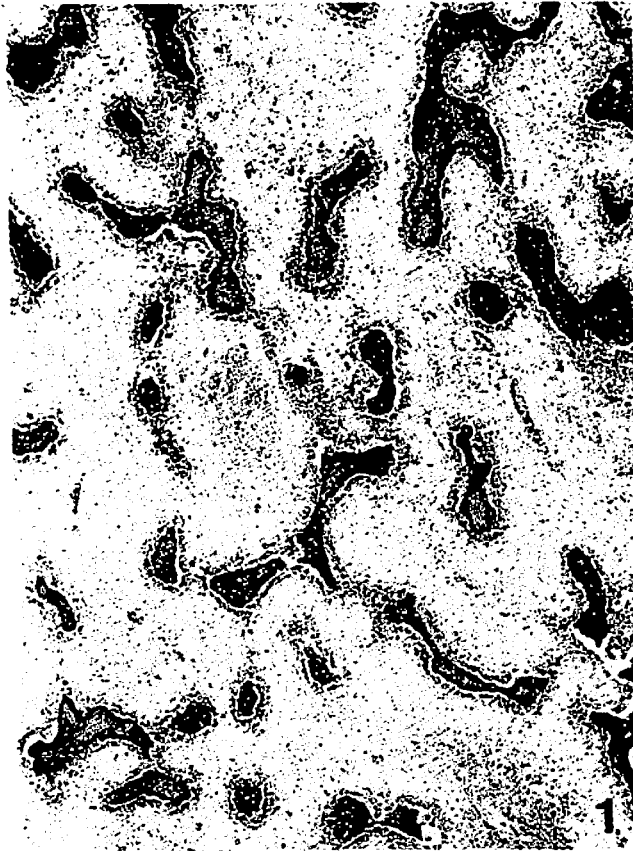


# 犬の前頭骨の線維性骨異形成

日本獣医畜産大学病理学教室出題 第22回獣医病理学研修会標本No.362



動物：犬，雑種，雄，15才。

臨床的事項：畜主によれば，13才頃に階段から落ちて失神し，獣医師の治療を受けたことがあり，その後，頭部に腫瘤ができて大きくなるとともに，斜頸を示すようになったという。X線検査では，頭部腫瘤に骨肉腫あるいは骨折の所見は認められなかった。臨床検査で肝機能障害がみられ，経過観察中に死亡した。

肉眼所見：頭部腫瘤は，頭頂部やや右寄りに8×6×4 cm大の前頭骨の隆起で，硬度は一様でなく，断面では一部に本来の骨組織を思わせる部位もあるが，不整な海綿状骨様であった。腫瘤は前頭洞を埋め尽くし，わずかに頭蓋腔内に突出していた。その他，肺内の砂状物散在，肝の外側右葉の巨大な血管腫などがみられた。

組織所見：腫瘤の大部分では，未熟な骨梁が不規則に存在し，その多くはC字型やY字型を呈し，骨梁間には血管に乏しい線維性組織が存在していた（写真1）。この骨梁は層板構造を示さず，封入細胞が比較的少なく，また骨芽細胞の縁取りがみられず，周囲には線維細胞様細胞が密に取りまわっているのが特徴であった（写真2）。また線維細胞様細胞が束状に配列し，線維様の組織像を呈する部位，同様の細胞が島状に密集し，その中に小塊状

の骨梁が存在する部位もみられた（写真3）。骨梁を形成する線維性組織の間は，疎な結合織，拡張した血管，時に粘液変性部位が認められた。炎症性細胞はほとんどみられなかった。破骨細胞による骨吸収像は，ごく一部にみられただけであった。

診断：この腫瘤は，線維細胞様細胞が増殖し，その中に骨基質がつくられ，類骨，骨梁が形成される過程（線維性化骨）をたどりながらも，全体として未熟な海綿状骨の状態にとどまっているものと考えられた。このような病変は，線維性骨異形成fibrous dysplasia of boneの所見と一致する。本例の場合，骨芽細胞の包囲がみられないこと，細い骨梁が不規則に形成されている点で，他の骨原性腫瘍（類骨腫，骨腫，傍骨性骨肉腫）あるいは化骨性線維腫と区別される。

骨折の治癒過程の遷延した像とも解されるが，その証拠も見出し得なかったため，近年腫瘍類似疾患または腫瘍様病変（WHOなど）として分類されている線維性骨異形成と，一応診断しておくこととした。

なお，肺の病変は，病的化骨と線維芽細胞増殖がみられたもので，頭部腫瘤と直接関係ないものと考えられた。